

MASAHIRO NAKANO

経済学部助教授。

1969年生まれ。熊本県出身。2000年神戸商科大学大学院経済学研究科博士後期課程修了。主要な研究テーマは経済変動の分析。とくに設備投資変動と貨幣・金融市場のつながりを中心に研究している。  
(URL)  
<http://www1.tcu.ac.jp/home1/mnakano/index.html>



中野正裕

以前、この欄において履修科目と学科選択について述べる機会をいただいたので(興味のある人は『学びへのいざない』平成15年版を読んでください)、今回はゼミナール(ゼミ)の選択について書こうと思う。

入学したての学生にゼミの話をするのは気が早いと言われるかもしれない。大学の現行の制度では、ゼミに所属するのは3年次から(2003年8月現在)であり、ゼミ選抜は2年次に進級しないと行わないからだ。

しかし、いざゼミ選抜の時期になると、真面目にゼミ選択を考えしっかり準備して臨んでくる学生とそうでない学生の差に驚くことが少なくない。なんの手がかかりも無いまま適当にゼミを決めて、後悔するわけにはいかない。また、なぜ自分のゼミを希望しているのかはつきりしないような学生を積極的に受け入れる先生も少ないだろう。ゼミナールとは何なのか、ゼミでは何ができるのか、何をやるべきか、ゼミの選択をどのように行うべ

きか、そういったことについて、いくつかポイントをあげてみよう。

## ① 少人数で「より専門的な」研究を行う場、それがゼミです

大学を卒業するためには教養教育、専門教育それぞれの過程で必要な単位を取得しなければならぬ。教養教育の講義が比較的少人数の教室で行われるのに対し、専門教育の講義は大教室で、時には数百人の受講者に対して行われることがある。そうした講義の中で学生が何か特定の分野に興味をもち、それに対してもっと踏み込んだ学習・研究をしたいと考えても、教員がそれを常時きめ細かくケアし、十分にフォローできるとは限らない。

そこで、多くの大学では学生を興味のある分野・領域ごとに少人数のグループに分け、その分野・領域に対して適切に指導や助言ができる教員を指導教官として付ける。これがゼミナールのひとつの目的だといえるだろう。

## ② ゼミでやれること、ゼミでしなければならぬこと

大学は本来「研究機関」としての側面が強い。先に述べたことがゼミナールの目的であり、ゼミナールが大学の過程において「最も専門的な研究を行う場のひとつ」だとすると、大学とは「自分のオリジナルな関心・志向を学術的な側面から磨く場」だといってもよいだろう。したがって、大学では「他の人と同じことを同じようにやっていたら」とりあえず大丈夫」という考え方は本来通用しないことになる。経済学部の学生は、自分が経済社会に対してどのような興味・疑問をもち、それをどのように明らかにしたいのかを絶えず意識しなければならぬ。重要なことは「なんとなく」ではなく、真剣に「なぜだろう」「どう考えればよいだろう」という意識を大切にすること、それを講義や書物、教員や先輩、後輩、友人たちに問いかけ、答を探そうとすることだと思っ。その答はゼミ以外の場でも見つかるかもしれないが、その答が本来最も見つかりやすい

# 2

大学で「ま・な・ぶ」とは、  
 どういうことが

のがゼミであり、またそのようなゼミを選ぶべきなのである。

### 3 自分に合ったアプローチ (技術)を選ぶのも大事

ずいぶん抽象的で威圧的なことを書いたが、要するに、「ゼミに入る前から自分だけの研究テーマを真面目に選んできてほしい」ということである。ただし、経済学では扱うテーマだけでなく、その分析手法(アプローチ)も様々に分かれる。そして、ゼミの中にはテーマよりむしろアプローチの仕方や分析の技術に近いグループで構成されているものも少なくない(私のゼミもどちらかというとその傾向が強く、アプローチは比較的共通しているがゼミ生のテーマは様々である)。

したがって、研究テーマだけでなく、どのような分析の仕方で自分の疑問を明らかにしていくかという点にも気をつけてほしい。一口に経済分析といっても、例えば市場、制度、歴史や思想の面からの分析など、様々な

アプローチがある。専門科目のうち専門基礎科目と呼ばれる講座を履修し、また経済学(や経営学)の入門書を読んで、それらのが身に付ける技術として自分に「合っている」か、どのような技術を高めていきたいか考えてほしい。

### 4 ゼミを楽しむするのは あなたです

ゼミナールは研究テーマや分析手法が比較的近い仲間同士で実りある議論を行い、各人の研究を進めていく場である。勉強はもちろんのこと、各種のイベントやスポーツ大会、ディベートなどに積極的に参加し、仲間同士の結びつきを深める和気藹々としたゼミが本学には数多くある。「ゼミ選びは面倒だ」「入りたいゼミが見つからない」「ゼミでの学習、研究にあまり時間を割きたくない」などと消極的に考えていては、結局損するだけだと思っ。「大学生」なのに「大学」から逃げてはいけない。大学生活で自由に利用できるものは数多くあるが、ゼミの仲

間(できれば指導教員もその中に含めてほしいが)と切磋琢磨し、ともに有意義な時間を過ごせたことが学生諸君のよき財産となれば、これほど嬉しいことはない。

